

会 議 録

会議の名称		第3回常総運動公園・常総広域地域交流センター指定管理者選定委員会		
開催日時		令和3年10月6日(水) 開会：午後1時30分 閉会：午後5時10分		
開催場所		常総地方広域市町村圏事務組合 事務棟2階会議室		
事務局 (担当課)		施設課		
出席者	委員	腰塚委員長、登坂副委員長、近藤委員、横瀬委員、 豊島委員、西田委員、吉田委員、田中委員、渡邊委員 以上9名		
	事務局	山中事務局長、瀬崎事務局次長 樋口施設課長、野口副参事、野村主査兼係長 以上5名		
公開・非公開 の状況		非公開	傍聴者数	—
会議次第		1 開会 2 あいさつ 3 協議事項 (1) 常総運動公園・常総広域地域交流センター管理運営事業候補者の選定について(面接審査) (2) その他 4 閉会		

1 開会

2 あいさつ

委員長

※前回の会議録の確認

3 協議事項

(1) 常総運動公園・常総広域地域交流センター管理運営事業候補者の選定について（面接審査）

事務局より、これまでの経緯と本日の面接審査の進め方の説明があり、A社のプレゼンテーションが開始された。

委員からの質問とA社の回答は以下のとおりであった。

質問

- ①アップサイクルの意味について
- ②キャンプ場を運動施設に併設した理由について
- ③SDGsとキャンプを関連付けた意味について
- ④キャンプ場の集客について
- ⑤P-PFIの収支の考え方について
- ⑥事業スケジュールについて
- ⑦シャトルバスやサイクリングの提案について
- ⑧地域住民への配慮、広域行政が認めた団体との接し方について
- ⑨交流センターでの確実なサービスの提供について

回答

- ①アップサイクルは、新しいデザイン、新しい価値に変えるということ。運動公園は、環境センターに隣接しているため、環境意識を変えていきたい。
- ②スポーツ合宿でのキャンプは有効である。また、キャンプ目的で子供連れで遠くの自然豊かなところまで行くということは、ネガティブな要素になるので、都市型の環境を整備することで、満足度を与えることができる。さらに、11,000㎡の面積は事業として成立する。
- ③SDGsのそれぞれの項目でワークショップ、コンテンツ化することで、一つのゴールにつながる気づきを与える。また、熊本の震災の後、子供達にストレスチェックを行ったとき、キャンプで野外に寝た体験がある子供の方が被災地でもストレスは圧倒的に低い結果であり、キャンプを通して生きる力を育むことを目指していく。
- ④ビギナー用のキャンプ場で、地元、周辺地域と両方の利用を考えて

いる。平日は小学校等の教育の一環で体験なども考えている。

- ⑤ハイシーズン、レギュラーシーズン、バリューシーズンと3シーズンに分け、天候リスクを掛け合わせ、キャンプ場の稼働率を算出。そこに平均単価を掛けることで収支予測を算出している。
- ⑥屋外プール、レストハウスを壊さずに取り組むことで早期事業開始となる。コミュニティーパークについては、地元の小学校、まちづくり協議会の方達と、どのように作っていくか協議をしていくため、その部分は1年程度要する。
- ⑦シャトルバスについては、車両運行企業がグループ内にあるため、車両が潤沢にあり、台数は需要を踏まえて検討するが、交流センターと守谷駅だけをつなぐピストンではなく、全体での運行を考えている。サイクリングは、河川沿いのコースなど自治体と協議してエリアを広げていきたい。
- ⑧地元5地区を中心に、地域と一緒に考えていく。
- ⑨一例として、コロナ禍で感染防止のルールを作り、遂行できるオペレーションに落とし込みマニュアル化していく。

続いてB社のプレゼンテーションがあり、委員からの質問とB社の回答は以下のとおりであった。

質問

- ①スケートボードパーク、3×3をここに造る意義と対象者について
- ②指定管理者で、SDGsを取り入れた運営について
- ③利用者数の考え方について
- ④施設整備に伴う騒音・渋滞・環境悪化への対応、ごみゼロ活動について
- ⑤キャンプ場の魅力創出とドッグランの施設規模について
- ⑥屋内運動施設の利用について
- ⑦パラスポーツの取り組みについて
- ⑧地域住民への配慮、広域行政が認めた団体との接し方について
- ⑨交流センターの安定的な経営の実現について

回答

- ①他では騒音問題、地域住民問題があるが、この地域性であれば、自由に大胆にできると思い、初心者から上級者までを対象とする施設を提案した。3×3は、親子、少人数でも、ここにすれば皆でできるという空間を提供したい思いで提案した。

- ②誰ひとり取り残さない公共施設を造るという強い思いであり、子供から高齢者、ハンディキャップを持つ方も、こちらの施設を利用していただきたいというのが考えである。
- ③これまでの実績に我々の取り組みでプラス何人取り込めるか、自主事業の参加人数、交流センターとの連携での波及効果を検証したうえで設定。
- ④利用者増による渋滞には交通誘導員を配置と混雑予測をホームページやSNSによりリアルタイムで混雑状況をお知らせして渋滞緩和を図る。飲食施設等から出るごみはリサイクルに取り組む。
- ⑤キャンプに関しては、レンタル品を充実させお試しで体験できることで魅力を創出する。ドッグランに関しては、中型犬、小型犬を対象に、施工実績からこの規模とした。
- ⑥日中はテニスの利用を想定し、砂入り人工芝と移動式のテニスネットを用意する。夕方以降はフットサル団体や野球の個人利用が多くなると考え、個人利用を可能とするためネットを設置してブースを3つに分けての貸し出し、そこにピッチングマシンを設置することで利用効果を上げたい。
- ⑦柏市にあるNPO法人と協力して障がい者スポーツに取り組んでいきたいと考えている。
- ⑧組合と協力して前向きに検討したい。
- ⑨継続を最優先に考え、温浴施設、健康増進施設の利用者を増やしていく。

これを受けて委員全員が採点し、記名の採点結果一覧を全員に発表した。そのうえで全員が自分の採点の意図について説明し、その後議論を重ねた。

全員の採点を合計して平均を出すと500点満点でA社は403点、B社は381点であった。両社とも基準点はクリアしていたので合格であるが、審査結果として合計点とおりに交渉権の順位を1位A社、2位B社とすることに全員が賛成した。

A社を評価した点は以下のとおりである。

- ・P-PFIに関して、初期投資を抑制し、収支計画上リスクの低減が図られていた。
- ・資源の有効活用として、既存施設及び緑を残し、極力再活用しつつ利用者を増やそうとする計画であった。

- ・スポーツにとらわれず、環境・防災・食・地域との関わりなどを子供たちが学ぶSDGsキャンプという新たな取組みが提案された。
- ・納付金の提案により、組合の財政負担軽減が図られていた。
- ・公園及び交流センターの指定管理業務について、堅実な運営が期待できる提案であった。

また、A社に対し委員から以下のような要望を伝えたいという意見があり、全員で了承した。

- ・組合や地域との連携により、魅力的な施設になることを期待する。
(キャンプでは収益面から学校との連携、キャンプだけでなくアクティビティの追加)

(2) その他
特になし。